

## 869 (貞観 11) 年の地震・津波と推定される津波の波源域

渡 邊 偉 夫\*

## 1. はじめに

貞観津波の研究については阿部・他(1990)の論文がある。関連した研究として今村(1941), 箕浦(1990), Minoura etc.(1991), 飯沼(1995)および千釜・他(1998)の論文や著書がある。

筆者も貞観地震・津波について1998年地球惑星科学関連合同大会で発表した研究(渡辺, 1998A)と論文(渡辺, 1998B)がある。これらによると, 唯一の正史「日本三代実録」(以下実録と略称)に記述されている地震・津波の場所は現多賀城市ではなく, 名取軍団があった現岩沼市で, 津波の波源域は現宮城県と福島県の沖合の三陸沖であろうと推定した。

今回は史料を総点検し, 次のことを行なった。1) 実録に関連する事項を再度検討, 2) 岩手県沿岸南部から茨城県沿岸北部までの58の各県, 郡, 市, 町, 村, 旧町, 旧村の史(誌)料その他から貞観津波に関連すると推定される伝承(物語)を選び出して検討, 3) 貞観津波が記述されているいくつかの文献(著書)を詳細に調査した。このようにして得られた津波の実態から津波の波源域を推定した。

以上の結果, 唯一の正史からは全体像を得ることは難しいので, 若干精度が落ちてでも数多くの史料から少しでも実像に迫ろうという試み本研究である。なお, 箕浦教授の御好意により, 仙台平野と福島県相馬市の津波堆積物の研究結果も加味して検討した。

## 2. 実録の検討(付録-1)

貞観地震・津波についての論文, 著書などはすべて付録-1に見られる貞観11年5月26日の実況報告のみで論じられている。しかし, その後同年9月7日地震を検する使を, 同年10月13日天皇の詔が発せられている。これらを見ると, 1つの大きな相違がある。

5月の報告に「陸奥国大に震動りて」とあったのが, 10月の詔では「陸奥国境に, 地震尤も甚しく」となっている。9月に地震・津波調査のため使を派遣していることを考えると, 5月の取り敢えずの狭い地域の報告から, 10月の調査した5月より広い範囲の報告である。ここで, 辞典(例えば広辞苑, 1991)によると, 「境」には地域とか範囲という意味があり, 5月の「陸奥国」も「陸奥国境」も同じことを言っているのではない

かという考えがある。とすると, 10月の「尤も」という表現がおかしくなる。したがって, 陸奥国境は陸奥国と同じであるとは云えない。まして天皇の詔の權威を考えると, この文面どおりに読むのが妥当であろう。すなわち, 陸奥国境が地震動最大であり, 津波も大きかったことが記述されている。この場所は朝廷側から見れば, 現茨城県沿岸北部[多賀郡多珂城: 現高萩市(中津, 1999)], 陸奥側から見れば, 現福島県沿岸南部[現いわき市(藤原, 1995)]であろう(図-1参照)。したがって, 実録の記述は現宮城県多賀城市[当時は多賀城という地名はなく, 国府多賀のことであろう(渡辺, 1998)]付近の地震・津波であったとする論文や著書は疑問である。

当時の社会・政治情勢を見ると[実録, 各縣市町村史(誌), 中津(1999)], 地震・津

\*日本気象協会東北本部

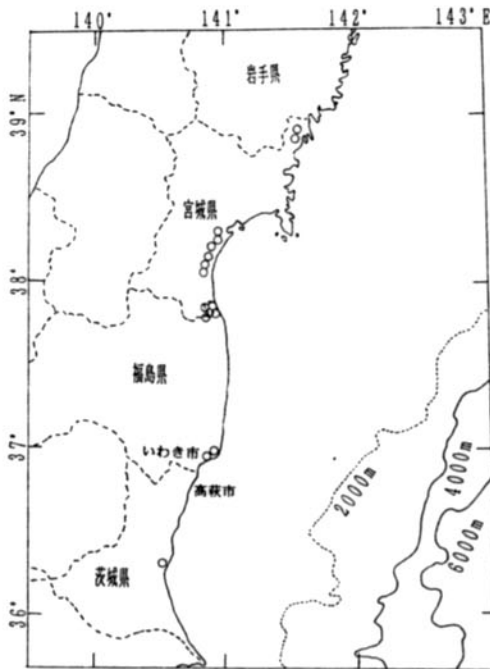


図-1 貞観地震・津波によるものと推定される県、郡、市、町、村、旧町、旧村の各史(誌)などから得られた伝承(丸印)

波発生時(9世紀中頃)、国府多賀は空白状態で機能を果たしていなかった。朝廷から派遣された陸奥守(この地震・津波発生時前後権限はほとんどなかった)はえみし(蝦夷)のゲリラを恐れて、陸奥に赴くことを嫌い多珂城に駐在していたとも云われる(中津, 1999)。これは地震・津波が最も激しか場所は陸奥国境であることと矛盾しない。

### 3. 県、郡、市、町、村などの各史(誌)からの伝承(物語)など(付録-2)

県史、沿岸とそれに近い郡、市、町、村、旧町および旧村の各史(誌)の中から、伝承(物語)を選び出した。これらの伝承は貞観地震・津波の年代に近いこと、つまり今から千年以上も前の年代であること、正史の記述と矛盾しないこと、つまり大きな地震・津波であること、など考慮したものである。調査した史(誌)料は岩手県が5か所、宮城県が

33か所、福島県が15か所および茨城県が5か所の計58か所である。得られた伝承は14であった。このうち、現宮城県気仙沼市大島は三陸沖津波の常襲地であることを考えると、2つの伝承は貞観津波のものであると明確に断定することに問題がある。他の資料があれば問題は解決するかも知れない。この他、飯沼(1995)と茨城新聞編(1981)にそれぞれ1つの伝承があり、計16となった。これらを図-1にプロットした。丸1つは伝承1つに対応する。この図から伝承はいくつかの沿岸地域にまとまっている傾向がある。その沿岸は次のとおりである。(図-2参照)

1) 図-2にみられるように、福島県北部の現新地町は数多くの伝承が狭い地域に集中している。図の(埋れ木)は伝承が多く存在するところに、8百年以上ものとも千年以上のもとも推定される埋れた倒木が多数存在する場所である(目黒, 1999)。

2) 宮城県の現仙台市から現岩沼市にかけ

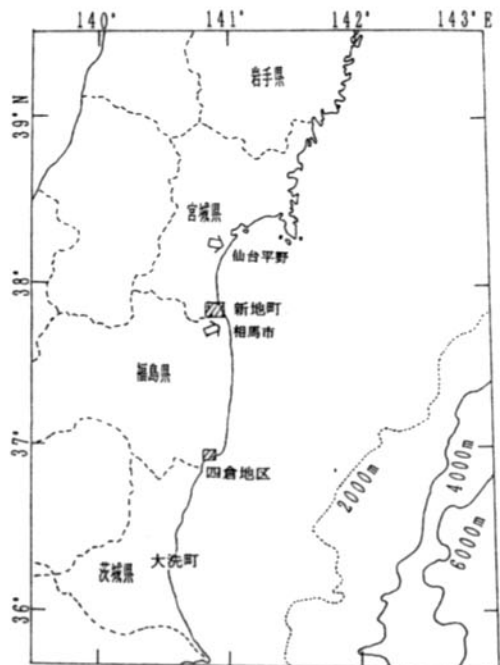


図-2 新地町(図-3)、四倉地区(図-4)および大洗町の位置  
矢印は箕浦(1998, 1999)による津波堆積物の確認された場所



図-3 福島県新地町の伝承の位置 (地名)

なお、(埋れ木)は最も多く津波によると思われる埋もれた倒木が存在した場所

て存在する。

3) 福島県南部の現いわき市にもいくつか存在する。このうち、図-4の四倉地区の千人塚は実際に存在していた(福島県史, 1969 およびいわき市中央図書館, 1999)。

一番南の茨城県大洗町(図-2参照)の伝承は地震・津波という記述はなく、季節も異なるが、貞観津波の年代に近く、夜半に発光現象があったことから、捨て難い伝承である。地震・津波が最も激しかったのが陸奥国境であるから、現茨城県もかなりの影響を受けたと推定される。

なお、松島成因説という奇妙な伝承がある。新収史料(1993)の「浦戸の今昔(三)」に「この島は中世以前は大島と称し、南は舟入島から西は州崎まで陸地であったが、貞観十一年五月の大地震で陥没し、数十の島になった」とある。ところが、「浦戸の今昔

(三)」(鈴木, 1980)にはこの記述はどこにもない。また、この他の史料(文献)にもなく、この伝承は存在しない。これに関連していると思われる続岩物語(佐々木, 1967)に、「(1) 貞観の大地震・大津嘯 (中略) この津波での溺死者は一千三百余人といわれる。ちなみに、松島の八百八島が出来たのもこの地震のためで、陸地の柔い所が陥没し、籬島明神の赤鳥居等が海底に没し、漁士がこの上を通るのに恐れおののき廻りみちをしたという。しかし松島の成因は、この地震のためばかりでないと科学者は説明している。」とある。このなかの籬島明神(神社)がある籬島は、塩竈港の沿岸にあって現在は埋め立てられ陸続きとなっている。したがって、この伝承は疑わしい。なお、松島の成因はこの地震のためであるという地質学者の学説は、ほとんど存在しない。

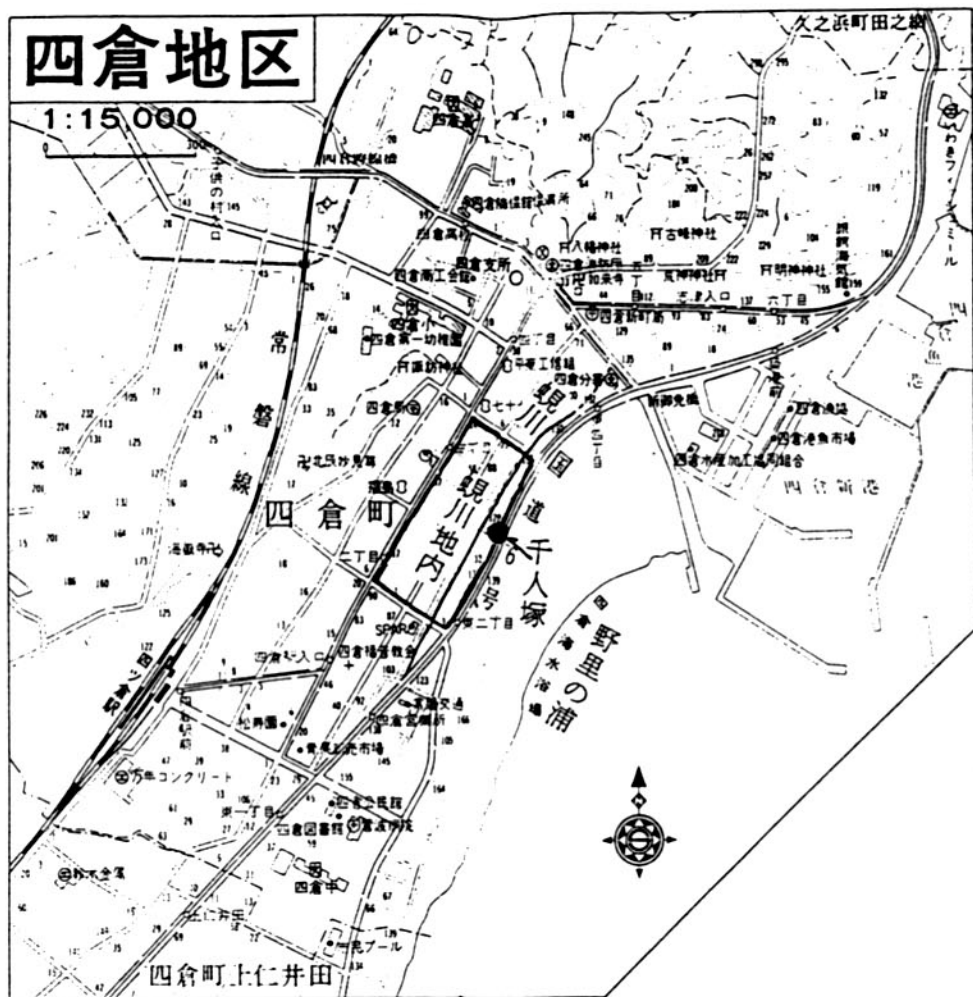


図-4 福島県いわき市四倉地区の千人塚の位置

#### 4. その他の資料

##### 1) 津波堆積物からの検証 (図-2 参照)

図-5は仙台平野において箕浦・他 (Minoura and Nakaya, 1991) がおこなった津波堆積物の調査の結果である。[箕浦 (1998) によって日本語に書き替えられた]

横軸は現在 (0) より3000年前 (いずれも炭素年代) までの地表面からの地質柱状図である。これを見ると、貞観津波の後に火山灰層が堆積しているが、早川・他 (1998) によれば、十和田湖火山が915年に、北朝鮮と中国国境の白頭 (ペクト) 山が947年に大噴火 (噴火クライマックス) したという。した

がって、少なくとも十和田湖火山の火山灰層が存在したことは間違いないようである。この層以前に、貞観津波のものと思われるかなりの量の砂 (津波堆積物) の存在が明瞭に見られる。

また、箕浦 (1999) からの私信によれば、福島県北部の現相馬市近郊における掘削調査の結果、厚さ1cmの淡灰色層と、薄い腐植泥を介在して下位に厚さ2cm程の砂層が発見されたという。砂層は、海生で内部に級化が認められず、これより下位にも腐植泥が堆積していることから、津波堆積物と判断された。この火山灰層は仙台平野で確認された新期灰白色火山灰層 (図-5 参照) と鉱物学的には

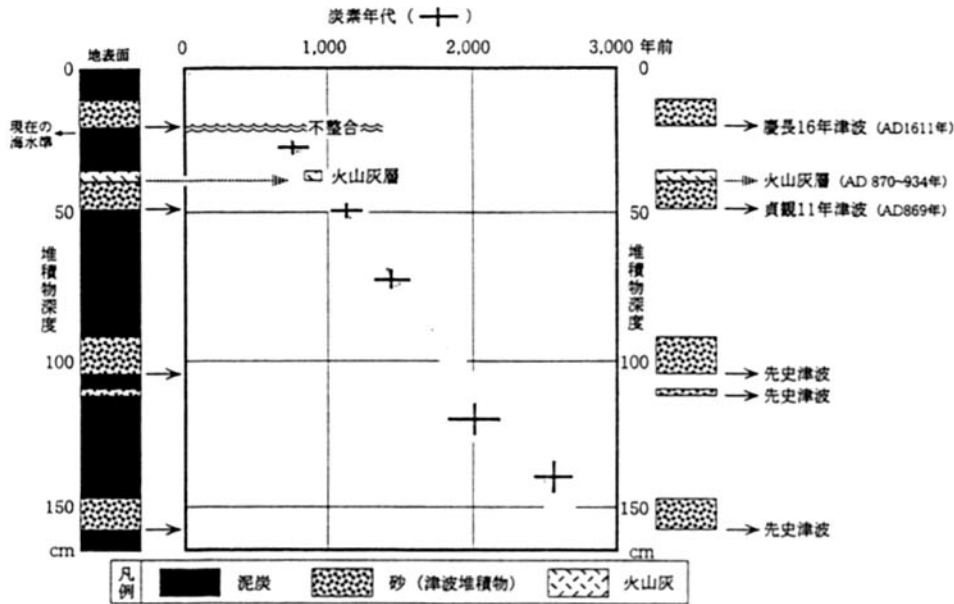


図-5 箕浦(1998)による、現在(0年)から3000年前(炭素年代)までの地表面からの津波堆積物

は完全に対比され、したがって、下位の砂層は、貞観津波による堆積層と結論されたという。この結果、少なくとも仙台平野から福島県北部沿岸にかけて、広範囲に津波の襲来があったことはほぼ間違いないようである。

## 2) 相馬藩の史料

相馬藩世紀の利胤朝臣御年譜(新収史料, 1993)に「十月二十八日海辺生波ニ而相馬領ノ者七百人溺死」とある。これが事実とすれば大変な被害である。年月の記載から、慶長三陸津波と考えられるが、これに関係する記述は相馬藩世紀の本文にはどこにも見当たらない[岩崎敏夫・外(校訂), 1999]。津波記事のあとには、相馬藩の居城となる中村城の大規模な改築の記事ばかりである。このほかの史料を見ても、これに関連する記事は全く見当たらない(今井, 1979)。

仮に房総沖津波とすれば、1677年や1953年の津波記録から判断すると、相馬領に大津波が襲来したとは考えられない。また、チリなどから襲来した遠地津波とも考えられない。とすると、慶長三陸津波以前に起こった大津波と結びつけて、たまたま記録(伝承)として残されたのかも知れない。結局、津波

堆積物の調査結果からも、貞観津波の災害の可能性は十分考えられる。

## 5. 津波の波源域

実録、伝承、津波堆積物などから、仙台平野から福島県北部沿岸までと、陸奥国境(福島県南部から茨城県北部の各沿岸)で被害を伴った津波の襲来があったものと推定される。このほか、宮城県北部沿岸にも問題はあがるが、津波襲来の可能性は考えられる。図-6の沿岸に示したぎざぎざ印はこれを現わしている。

図-6は以上を総合して推定した津波の波源域である。これは日本海溝に沿って宮城県はるか沖から茨城県北部はるか沖にかけて長さ約200km、幅約50kmである。図から分るように、この波源域の南部は陸奥国境に最も近い。なお、仙台平野から日本海溝の波源域まで約200km、陸奥国境からは約160kmである。

震度6の範囲を円と仮定し、 $r$ を震央から震度6を観測した地点までの距離(半径,  $r$  km),  $M$ を地震マグニチュードとすると、 $\log r = 0.68M - 3.58$ (村松, 1969)である。陸

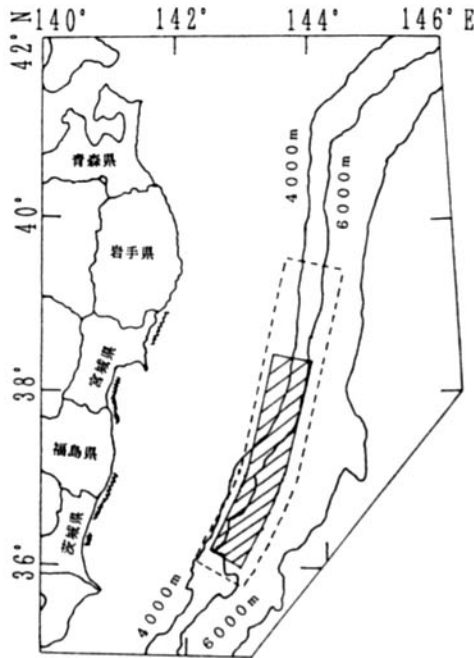


図-6 被害を伴ったと思われる貞観津波の襲来海岸(ぎざぎざ印)と波源域点線は箕浦(1990)による津波の波源域の範囲

奥国境を震度6とすると、 $M=8.5$ となる。この値はいままで三陸沖で発生した地震のうちで最も大きい。もし、仙台平野を震度6とすると、さらに $M$ が大きくなる。

## 6. まとめ

以上をまとめてみると、次のようになる。

1) 実録から、陸奥国境に於いて地震が最も激しく、津波も大きかった。現地名の場所は福島県南部から茨城県北部であろう。

2) 岩手県南部沿岸から茨城県北部沿岸までの県、郡、市、町、村、旧町、旧村およびいくつかの著書から、伝承を選び出した。その結果、貞観地震・津波と思われるものは16あった。これらはいくつかの狭い地域に集中しており、現宮城県多賀城市から岩沼市にかけてと、現福島県北部新地町にまとまっている。伝承が存在している最も北は宮城県気仙沼市大島で、最も南は茨城県大洗町(いずれ

も精度はやや落ちる)である。

3) 箕浦(1998, 1999)によれば、貞観津波と思われる津波堆積物は仙台平野と福島県相馬市に存在している。また、相馬藩世紀の津波被害記事は貞観津波の可能性が考えられる。

4) 津波の波源域は宮城県はるか沖から茨城県はるか沖にかけて、長さ約200 km、幅約50 kmである。震央の位置は陸奥国境はるか沖の北緯37°、東経143°位が妥当なところであろう。今回求められた震央の位置と津波の波源域は過去に例はない。 $M$ が8級で津波が福島県沿岸を襲った例は1793年2月17日(寛政5年1月7日)である(宇佐美, 1995)。今回の津波の波源域の北の部分は重なっていると推定されるが、津波の高さは小さい。なお、津波を発生させた地震マグニチュードは8.5で、今まで三陸沖で発生した地震のうち最も大きい。

唯一の正史の新しい事実(解釈)と広く分布している伝承とは互いに矛盾するところはない。伝承の精度に問題はあるにしても、千年以上も前の現象で当時の社会・政治的背景を考えると、伝承は正史を十分に補って余りあると云えよう。

伝承は今後もまだまだ発掘される可能性は大きい。更に発掘を行なって、伝承の精度を高め、貞観地震・津波の実態に迫りたい。

## 謝 辞

東北大学箕浦教授には津波堆積物の調査結果を心よく提供され、本研究に適切な助言を戴いた。厚くお礼を申しあげる。

また、福島県新地町教育長目黒美津英氏には現地調査のご案内と貴重な資料の提供を受けた。宮城県岩沼市図書館と福島県いわき市中央図書館の担当者から新しい資料を戴いた。これらの方々に深く感謝する。

## 参 考 文 献

阿部寿・菅野喜貞・千釜章：仙台平野におけ

- る貞観 11 年 (869 年) 三陸津波の推定, 地震, 第 2 輯, 43, pp.513 ~ 529, 1990.
- 千釜章・多田章一郎・青沼正光: 下北半島における津波の伝承とヒバ林的成因, 地震, 第 2 輯, 51, pp.61 ~ 73, 1998.
- 藤原仁: 福島県における津波の記録 (案, 印刷されず), p.1, 1995.
- 福島県史編集委員会: 福島県史, 24, pp.588 ~ 589, 1969.
- 早川由紀夫・小山直人: 日本海をはさんで 10 世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日一十和田湖と白頭山一, 火山, 43, pp.403 ~ 407, 1998.
- 茨城新聞編: 茨城の史跡と伝説, pp.160 ~ 162, 1981.
- 飯沼勇義: 第 3 章 貞観津波と仙台平野, 仙台平野と歴史津波, 宝文堂, pp.76 ~ 103, 1995.
- 今村明恒: 1. 三陸沿岸における過去の津波に就て, 地震研究所彙報, 別冊 1 号, 昭和 8 年 3 月 3 日の三陸地方津波に関する論文及報告, 第 1 編 論文, pp.1 ~ 16, 1934.
- 今野美寿: 相馬藩政史, 上巻, 東洋書院, pp.32 ~ 37, 1979.
- いわき市中央図書館: 担当者の私信による, 1999.
- 岩崎敏夫・佐藤高俊 (校訂): 相馬藩世紀, 第一, 利胤朝臣御年譜, p.14, 1999.
- 目黒美津英: 現地調査で口頭説明, 1999.
- 箕浦幸治: 東北日本における巨大津波の発生と周期, 歴史地震, 第 6 号, pp.61 ~ 76, 1990.
- Minoura K. and S. Nakaya: T races of tsunami preserved in inter-tidal lacustrine and marsh deposits: Some examples from northeast Japan, Jour. Geology, 99, pp.265 ~ 287, 1991.
- 箕浦幸治: Minoura and Nakaya, 1991, の図の説明を日本語に書き替えたもの, 1998.
- 箕浦幸治: 私信による, 1999.
- 村松郁栄: 震度分布と地震のマグニチュードとの関係, 岐阜大学教育学部研究報告, 自然科学, 4, pp.168 ~ 174, 1969.
- 中津竹子: みちのく燦々消されていた東北の歴史, 新人物往来社, pp.1 ~ 207, 1999.
- 新村出編: 広辞苑, 岩波書店, p.1010, 1991.
- 佐々木喜一郎: 岩沼の災害志, 続岩沼物語, pp.286 ~ 287, 1967.
- 鈴木寛蔵: 浦戸の今昔 (三), 塩釜市浦戸諸島開発総合センター, pp.1 ~ 117, 1967.
- 武田裕吉・佐藤謙三訳: 訓読日本三代実録, 臨川書店, pp.1 ~ 1184, 1986.
- 東京大学地震研究所編: 新収日本地震史料 (本文で新収史料と略称), 続補遺, p.2 および p.43, 1993.
- 宇佐美龍夫: 新編日本被害地震総覧 [増補改訂版], 東京大学出版会, pp.94 ~ 95, 1995.
- 渡辺偉夫: 869 (貞観 11) 年の三陸津波の実体と三陸沖大津波の波源域, 1998 年, 地球惑星科学関連学会合同大会予稿集, sf: 活断層と古地震, p.312, 1998a.
- 渡辺偉夫: 869 (貞観 11) 年の地震・津波の実態と推定される津波の波源域, 歴史地震, 第 14 号, pp.83 ~ 99, 1998b.
- 以上のほか, 県, 沿岸とそれに近い郡, 市, 町, 村, 旧町, 旧村の各史 (誌) を参考にした。(数多いので省略)

## 付録-1 「日本三代実録」

貞観十一年五月

二十六癸未、陸奥国、地大に震動りて、流光昼の如く隠映す。頃之人民叫呼び、伏して起つ能はず、或は屋仆れて死に、或は地裂けて埋れ殞にき。馬牛は駭き奔りて或は相昇り踏む。城郭倉庫、門櫓牆壁の頽落れ顛覆るものは其の数を知らず。海口は哮吼えて、声雷霆に似、驚涛涌潮り、折回き漲長りて忽ちに城下に至り、海を去ること数十百里、浩々として其の涯を辨へず、原野も道路もすべて滄溟と為り、船に乗るに遠あらず、山に登るも及び難くして、溺れ死ぬる者千許、資産も苗稼も殆と子遺無かりき。

同年九月

七日辛酉、(中略)従五位上行左衛門権佐兼因幡権介朝臣春枝を陸奥国の地震を検する使と為しき。判官一人、主典一人。

同年十月

十三日丁酉、詔して宣ひけらく、【(中略)如聞、陸奥国境に、地震尤も甚しく、或は海水暴に溢れて患と為り、或は城宇頽りに圧れて殃を致すと。百姓何の辜ありてか、この禍毒に罹ふ。憮然としてはじ懼れ、責深く予に在り。今使いを遣りて、就きて恩くを布かしむ。使、国司と与に、民夷を論せず、勤めて自ら臨撫し、既に死にし者尽く収殯を加え、其の存ける者には詳に賑恤を崇めよ。其の害を被ること太甚だしき者は、租調を輸さしむるなかれ。鰥寡孤独の、窮して自ら立つ能わざる者は、在所に斟量して厚く支え濟くべし。務めて矜恤の旨を尽し、朕親ら観るが若くならしめよ】と宣り給ひき。

(武田・他、1986より)

## 付録-2 県、郡、市、町、村、旧町、旧村の各史(詩)などからの伝承

宮城県気仙沼市大島(大島誌、1972、744頁より)

十二 津波伝説(島分裂、船こぼれ)

大島は津波のときはいつも大きな被害を受

けていた。いつの頃の大津波の時か、島は三つに分断されたちう。田中浜から浦の浜へ、そして小田の浜から朝根浜へと津波が通り抜け島は三分されたという。そのとき島内に灯があったのは休石屋敷一軒だけだったといわれている。

光明寺の東の入口が休石である。藩主公来島るとき休まれたので休石と呼ばれるになったとされている。その休石のすぐ前の畑に「船こぼれ」と呼ばれる畑がある。津波で押しあげられた船がここに留まった所とされている。竹の下の地名ももとは「鯛の下」で、やはり津波のとき鯛が打ちあげられた所、合柄は「合殻」で大量のかき殻の打ちあげられた所と言い伝えがある。

宮城県多賀城市(多賀城市史、1973、229頁より)

末の松山

多賀城・八幡

二百年前の安永元年頃、老松が九本あったとある。昔、この里に相愛の男女があつて松の根元で時々会つていた。ある時、女は「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山浪も越えなむ」と詠んで男に示して喜ばせたが、幾ばくもなく女は他の男に走った。当時、多賀国府に在任中の清原元輔が失恋した男に代つて詠んだのが「ちぎりきな形見に袖をしぼれつつ末の松山浪越さじとは」であった。この歌が京に伝えられて失恋することを浪越し男、女を浪越させ女といったという。

同上(多賀城市史、1986、3、114～115頁より)

猩々ケ池

八幡の上屋敷に「猩々ケ池」と呼ばれる四、五坪ほどの池が田の中にあつて、次の伝説がある。

昔、八幡の町に酒屋があり、あるとき髪が赤く、顔は朱色をした異人が来て、酒を大量に飲んで帰った。その後もたびたび酒を飲み訪れて来たが、何処に帰るかはわからなかった。村の若者衆がそれを殺そうとたくらんでいたのを、酒屋の近くに住む老人が聞



き、異人を憐み訪れるのを待ってその事を伝えた。異人はそれでも酒が欲しいといて、酒屋で酒を飲んで帰った。待ち受けていた若者衆がそれに深手をおわせた。異人はようやくの思いで老人の家を訪れ、私は間もなく死ぬであろう、屍は町の東南にある池に棄ててくれ、今日より六日後にこの池に大津波がおしよせるが、そのときは末の松山に登って難を避けよ、といい遺してこときれた。老人は言われたとおりに屍を池に棄てた。はたして六日後に津波がおしよせ村はことごとく波に飲まれてしまった。老人の一家は末の松山に逃れてことなきをえた。【塩松勝譜】

宮城県仙台市(仙台市史, 1952, 155頁より)

藤塚 六郷大字藤塚

名取河口の右岸の関上は、もと里浜と称し船着場であった。昔、里浜の橋浦に茂左衛門という者があって、ある日のことなぎさに何かゆり上げられたものがあるので近ずい見ると藤の筏でその上に金色に光を放つ御神体がのっていた。この御神体を祀つたのが今の湊明神で、藤の筏は川をへだてた中里浜に埋めて塚を築いた。それ以来里浜を関上、中里浜を藤塚と呼ぶようになった。御神体は後に高館の那智山権現に納つたが、藤塚の方は貞山堀の西側の土手下に十坪ばかりの塚があって、上に碑が立ち藤の古木十数株が生えている。多分は古墳であろうという。

湊神社はもともと水門と書いたが、近世になって里浜はしばしば大火に見舞われ、水門明神の御託宣に神名を地名にすれば火災が起らないとあったので今のように関上に改め、神名は湊に改めたという。

同上 (宮城県史, 1973, 257頁より)

藤塚 仙台・藤塚

五柱の神が藤の筏に乗ってこの浜に上陸したといい、五柱神社がある。藤に根が生えて塚の上に茂り、下をくぐると疫病を除けるといふ。この藤の古木は左巻きで知られる。

宮城県仙台市(仙台市史, 1952, 211頁より)

五柱神社 六郷大字藤塚

昔、関上の浜にゆり上った藤の筏を埋めた

という藤塚の南一町ばかりの所に在って、境内に藤の古い株が数株茂っている。この藤蔓の間をくぐると疫病にかからないといて、子供を連れて参詣に来る人が多い。この藤は昔、五柱の神がこれも藤の筏に乗ってこの海岸に流れ着き、筏の藤に根が生えたものだそうで、土地では藤塚の地名は、これに因つたものだといっている。この藤は普通のものとは異って、みな左巻きである。(郷土の伝承)

宮城県名取市(飯沼, 1995, 92~100頁より)

清水峯神社由緒 地名姓氏 その他 (清水峯神社 大友氏所蔵)

小豆島村 戸口凡六十四神社一午頭天王社所祭素戔鳴尊少将井稲田姫命三神一社伝云  
清和天皇貞観十二年自播州明石浦広峯本村ヨリ奉還シ之レヲ祭ルモノナリ

貞観十二年播州広峯ヨリ分霊祭事

(中略) 時ニ貞観ノ頃ハ頼リニ疫病流行シ庶民大イニ苦シミケレバ当氏子ハ早久モ京都ニ至リ時ノ帝播州広峯ノ神徳ヲ信仰セラレ社殿ヲ祇園ノ地ニ御建立アリテ御祭祀アルヤ疫病忽チ止ミ万民大イニ安穩スルヲ得タリト云フ京師ノ思念又愈々増進シ来リ等シク之レニ傲ハントス一同ニ議リテ曰ク当鎮守素戔男命ト武内宿禰東國ノ安穩祈誓ノ為メニ此所ニ祭祀セラレシ次テ日本武尊モ東夷征伐ノ祈願アラセラレテ厚ク給ヒシ故事存ジレドモ如何セン其ノ年間久シク世ノ盛衰ニ連レテ其ノ止ハン事ナキ神社モ如是有無ノ間ニ座々ニ至レルハ恐レ多シ小豆島ハ始メテ武内宿禰ノ舟ヲ着セラレシヨリ続イテ日本武尊モ上陸有ラセラレタルヲ似テ又当所ヨリ初メテ開キタリト云フ因テ今モ当社ノ裏ヲ中道ト云ヒ其レヨリ山手ニ行ク道ヲ米田道ト云フ之レヨリ山ニ浴ヒテ道路ヲ通ジタリト云フ

当社ノ南三丁斗リノ所ニ沖道橋ト云フモアリ其ノ南手ニ来着崎ト云フ所アリ今狐崎トモ云ヘリ

宮城県岩沼市(宮城県史, 1973, 21, 228頁より)

## 千貫松 岩沼・千貫南長谷

昔は赤松の大木の林で、沖の漁船の目標になっていた。ある時、国府で用材として伐ることになったが、目標を失うことを恐れ千貫を納めて伐ることを止めてもらったので、千貫松と称した。貞観十一年の陸奥の大津波には、船をこの山のおもとの松につないで村民は助かったという。

福島県新地町(新地町史, 1993, 自然・民族編, 380~381頁より)

## 大津波(船越地蔵, 小鯨, 八千山)

福田の地蔵森山(標高三四八メートル)の上に、御舟地蔵または船越地蔵と呼ばれる石の地蔵さまがある。

この地蔵さまは、東へ四キロメートルも離れた山りくの船越沢というところに鎮座していたが、むかしこの地方が大津波に襲われたとき、船に乗ってこの山頂へ遷座したという。土地の人は、これを奇瑞としておまつりしているが、ことに漁師の人たちにあつく信仰されている。

明地に近いところに、小鯨というところがある。これは大津波のとき鯨が寄ったところだという。

また新地駅の北の作田に八千山という小高い山がある。やはり大津波のときこの山に登って八千人(多数の意)の人の命が助かったと伝えている。

この山の上には山神さまがまつてあるが、常磐線開通のとき山を二つに掘り切ったので、山自体は原形をとどめていない。

同上(目黒, 1999)

## 大津波(淵の上, 埋れ木)

津波が到達したことを示す丘を淵の上とっている。この地域一帯には多数の埋れ木がある。八百年以前のものとも千年以前のものとも云われている。現在家屋の柱として使われている家がある。

福島県いわき市(いわき市史, 7, 1982, 534頁より)

## 大仏石

四倉町上仁井田にある、大仏石と呼ばれる立石は、海より上った石だといいい、次第に成長すると昔からいわれて、現在は二メートル以上になっている。この石に子育ての健康祈願をする者が多いのは、この石のように丈夫で育つようにとの意味からである。祭礼は八月十五日。

同市(いわき市史, 7, 1982, 548頁より)

## 千人塚

昔津波があつて、野里の浦に多数の死体が集まったのを、付近の松林内に埋めて、塚を築いたのが今の千人塚で、蜷川地内にある。

同市(福島県史, 1969, 24, 588~589頁より)

## 同上

狐や蛇が埋まったという塚の話もだんだん現実に近い話になって、千人塚などという塚の話も生まれてくるのであろうか。いわき市四倉町の野里の浦(四倉海岸を昔はこういった)に、昔大津波があつて、多数の死体が集まったのを近くの松林に埋めて塚をきずいたのが、今は千人塚と呼ばれている。現在は新国道六号線ができて分からなくなった。(統磐城の伝説 いわき市四倉町蜷川)

茨城県大洗町(茨城新聞, 1981, 160~162頁より)

## 大洗磯前と平磯神社(東茨城地方)

斉衡三年の十二月というから、今をへだたること千百年の昔である。鹿島郡大洗磯前(現在茨城県大洗町)に海水を煮て塩をつくる翁があつた。ある時夜半に起き出して海を眺めると、ひときわあざやかな光明が空を焦がすかと疑うまでに照りかがやいていた。夜が明けて海岸を見れば、昨日まではなかった二つの怪石が波打ち際に立っている。高さは二つとも三十センチばかり、人の手で作ったものでなく、まさしく神のたくみと思われるような尊い姿をしていた。翁はいたく怪しんだが、手でさわることさえはばかれて、そのまま家に戻った。その翌日また浜に出て見ると、新たに二十あまりの小石が二つの石の

左右にひざまつくように並んでいる。石は異なる色彩を施してあって、中には袈裟法衣をつけたように見える僧形のものもあった。しかしそのいずれにも年月などは書かれていなかった。塩焚きの翁はただいぶかしさに目を見張るばかりであった。

その夜、神がある人についていわれた。「われは大己貴命と小彦名命である。昔この

国を造りなして、去って東海に往ったが、今また民を済うために帰って来たのである」と。人々はおそれかしこみて、これら大小の石を二た組にわけ、大洗磯前と、川を隔てた那珂郡平磯（今の那珂湊市）の酒列磯前とに社殿を営んでいつぎ祭った。このことは六国史という朝廷の公記録の中の文徳実録に“常陸上言す”として載せている。